

沖縄戦研究の新たな視座 —米軍作戦報告書に読み解く知念半島の戦闘—

仲本 和彦[†]

はじめに

1 知念半島の戦闘はどのように描かれてきたか

- 1-1 沖縄県史及び市町村史
- 1-2 日本軍戦史
- 1-3 米軍戦史
- 1-4 守備軍の撤退と住民被害の関係

2 米軍記録とはどのようなものか

- 2-1 艦砲射撃及び空母艦載機による爆撃の記録
- 2-2 地上戦における戦闘記録
- 2-3 グリッド・マップ (Grid Map)

3 米軍記録から明らかになること

- 3-1 知念半島への陽動作戦と艦砲射撃による被害
- 3-2 地上部隊による知念半島攻略作戦
- 3-3 収容所となった知念半島

おわりに

はじめに

沖縄県南城市がある知念半島は、沖縄戦末期に激戦が繰り広げられた沖縄本島南部にありながら、日米の公式戦史にはほとんど登場しない¹。その主な理由として、沖縄戦の終盤に日本軍が那覇市首里の司令部を放棄して南部へと撤退した際、守備軍の主力が配置されなかったからである。戦史では、南風原—具志頭—東風平—摩文仁のラインの戦闘を詳細に描くものの、大里城址周辺を除いて知念半島はほとんど描かれていない。よく“記録なくして、歴史なし” (No records, no history.) と言われるが、知念半島における沖縄戦の実態は詳しく継承していけるだろうか。

本稿は、このように戦後 75 年を過ぎても未だ解明が進んでいない地域の戦闘の実態を解析する一事例として、沖縄県公文書館（以下、「当館」）が所蔵する米軍資料の有効性を紹介するものである。本稿ではまず、知念半島の戦闘はこれまでどのように描かれてきたのかを見ていく。次に、米軍の記録は知念半島の戦闘についてどのような新事実を提示してくれるのかを紹介する。そうすることで、地域にとっての米軍記録の意義について考えてみたい。

1 知念半島の戦闘はどのように描かれてきたか

沖縄戦においては、沖縄県民の 4 人に 1 人が命を落としたと言われる。日米の壮絶な戦いについて

[†] なかもと かずひこ 公益財団法人沖縄県文化振興会公文書管理課 資料公開班長

¹ 沖縄戦当時は島尻郡大里村、佐敷村、玉城村、知念村。現与那原町の字与那原、上与那原、板良敷は当時、大里村に属していた。

日本側の記録は当初皆無に等しかった。戦争が〈負け戦〉だったこともあって、敵に重要な情報が渡らないようにと記録類は廃棄されたり、激しい戦火の中で焼失したりしたため、旧日本軍の記録はわずかしか残っておらず、住民にしても戦の最中に日記のような形で日々の様子を記録にとどめることなど到底できるものではなかった。そして、戦禍を生き延びた人々の体験を証言記録として採取していくのにも時間を要した。人々は戦後の混乱期を生き延びていくのに必死であり、壮絶な体験を語るには、語る側にも語られる側にも一定の時間が必要だったのである。そこで、戦争体験を記録に残すことは、最初、本土に復員した退役軍人やその証言を聞き取りしたプロの書き手によって始められた。しかしその多くは、日本軍と住民はいかに勇敢に戦い、亡くなっていったかというような〈美談〉として仕立て上げられることが多かった²。

本章では、自治体史、日本軍戦史、米軍戦史のそれぞれにおいて、知念半島の戦闘がどのように描かれているかを見ていくことにする。

1-1 沖縄県史及び市町村史

住民の戦争体験が記録として残されるようになるきっかけは1952年（昭和27）の「戦傷病者戦没者遺族等援護法」（以下、援護法）の制定である。沖縄では軍民入り乱れての地上戦が繰り広げられたことから、援護法の適用にあたって日本政府は一般住民の実態調査に着手した。その結果、戦場で軍に徴用されたり軍の要請により戦闘に協力して負傷または死亡した住民がいたことが明らかになる³。

冷戦下の1960年代にベトナム戦争が激化すると、沖縄の米軍基地は補給拠点としての重要性が増し、B52戦略爆撃機の発進基地としても使用されるようになる。いわゆる「ベトナム特需」で街が潤う中、戦火で犠牲になるベトナム住民の姿を目の当たりにした沖縄の人々は、かつてこの地でも多くの住民が犠牲になったことを思い起こし、二度と同じような犠牲者が出ないようにするために、沖縄の体験を記録に残す必要性を強く感じるようになる。すでに終戦から20年が過ぎ、戦争体験の風化が危惧される時期でもあった。そこで、行政が主体となって包括的なオーラル・ヒストリー事業が行われることになり、県内各地で録音テープが回され、体験者の肉声が記録されていった。その成果が『沖縄県史』の第9巻（1971年）及び第10巻（1974年）として結実する⁴。ところが、沖縄本島から離島の市町村までも網羅し、両巻合わせて1,200頁にもものぼる同書においてもまた、知念半島の旧4村については、目次さえも立てられなかった⁵。

その後、各市町村も独自の取り組みを行なうようになり、1974年（昭和49）の『那覇市史』⁶を皮切りに、1984年（昭和59）の『浦添市史』⁷など、地域住民の戦争体験と被害を詳細に綴った市町村史が次々に刊行されていった。その流れは1990年代に入っても途切れることなく、中には市町村ではなく字単位で戦争編を刊行するところも出てきている。そのような中、知念半島にある知念村、

² 林博史『沖縄戦が問うもの』（大月書店2010年）pp.197-198

³ その記録は現在、当館が所蔵する援護法関係文書の簿冊の中に含まれる「戦闘参加者についての申立書」「身上申告書」「現認証明書」「行動経過書」などとして残っている。拙稿「沖縄戦に関する新資料の紹介～援護業務関係文書を中心に～」『沖縄県公文書館研究紀要第18号』（沖縄県文化振興会2016年3月）参照

⁴ 琉球政府文教局『沖縄県史 第9巻（各論編8 沖縄戦記録1）』（琉球政府1971年）、沖縄県教育委員会編『沖縄県史 第10巻（各論編9 沖縄戦記録2）』（沖縄県教育委員会1974年）

⁵ 唯一の例外は久高島で、知念岬での陣地構築、沖縄本島山原への疎開など、島民4人の島外での戦争体験についての証言が載っている。沖縄県教育委員会編『沖縄県史 第10巻（各論編9 沖縄戦記録2）』（沖縄県教育委員会1974年）pp.903-932

⁶ 那覇市企画部市史編集室編『那覇市史 資料編第2巻中の6 戦時記録』（那覇市1974年）

⁷ 浦添市史編集委員会編『浦添市史 第5巻 資料編4 戦争体験記録』（浦添市教育委員会1984年）

佐敷町、玉城村の3町村も戦争編を発刊した⁸。しかし、その多くは1945年（昭和20）4月頃まで知念半島に配備されていた日本軍に関する記述で占められ、6月頃の戦闘については触れていない。日本軍の配置は概ね次のようになる。

知念半島は中城湾を望む丘陵地帯に位置するが、沖縄本島東海岸から敵が上陸してくることを想定して、中城湾臨時要塞が建設されることになり、1941年（昭和16）頃から砲台や兵舎が設置されていた⁹。1944年（昭和19）3月に沖縄守備軍の第32軍が編成されると、満州に配備されていた第9師団（武部隊）が同年7月、沖縄に移駐してきた。しかし、同年12月に同師団が台湾に抽出されることになると、代わって第62師団配下の独立歩兵第15大隊が北谷から知念半島に移動してきた。その後、同師団も第32軍の配備変更により、米軍上陸直前の1945年（昭和20）2月に独立混成第44旅団第15連隊と入れ替わった¹⁰。

同連隊は、第1大隊が旧玉城村字糸数、第2大隊が知念国民学校、第3大隊が玉城村字前川に本部を置いた。大里村には独立混成第44旅団第2歩兵隊、第32軍直属の野戦重砲兵23連隊、重砲兵第7連隊などが配備された¹¹。その他には、重砲兵第7連隊第2中隊が知念村字久手堅、同第3中隊が知念村知名、野戦高射砲第79大隊が佐敷村字手登根と玉城村百名、海軍の砲部隊が佐敷村屋比久にそれぞれ陣地を置いた。『知念村史』によると、3月24日に米艦隊による大規模な艦砲射撃が行われ、陣地周辺には直径約25メートルのクレーターが数十カ所にできるなど甚大な被害を受けたため、部隊は佐敷村字手登根のフナクブ洞穴などの自然壕などに避難した。米軍が首里の守備軍司令部に迫ってくると、独立混成第44旅団主力は首里戦線へと移動となり、1945年（昭和20）4月26日以降は旅団知念支隊として重砲兵第7連隊、船舶工兵第23連隊のみが残された¹²。玉城村には戦闘部隊はいなくなった¹³。

1-2 日本軍戦史

日本軍の戦史としては、防衛庁防衛研修所戦史室が編んだ『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』及び『戦史叢書 沖縄方面海軍作戦』がある。『戦史叢書』が出たのは、終戦から20年以上も経った1968年（昭和43）のことであった。それらは〈後発〉の強みを生かして、米側の戦史や日本軍兵士の手記などを存分に活用し、大里に限っては日本軍の動きを中心に比較的詳しい記述がある¹⁴。それによると、日本軍は首里防衛陣地のうち、左翼方面については那覇の与儀、国場、識名の縦深陣地により全陣地の崩壊は阻止し得るものの、右翼方面においては与那原、南風原の津嘉山付近に殺到されれば全陣地の組織が崩れると憂慮していたため、与那原、南風原地区において米軍の進攻を阻止するよう各部隊に督励していた¹⁵。その与那原と南風原の間に位置するのが大里であった。大里の戦闘の概略は次のようになっている。

5月下旬に知念半島に残っていたのは重砲兵第7連隊及び船舶工兵第23連隊であるが、5月25日、

⁸ 知念村史編集委員会編『知念村史 第3巻 戦争体験記』（知念村役場1994年）、佐敷町史編集委員会編『佐敷町史 4戦争』（佐敷町役場1999年）、玉城村史編集委員会編『玉城村史 第6巻 戦時記録編』（玉城村役場2004年）

⁹ 前掲『知念村史』p. 37

¹⁰ 前掲『玉城村史』p. 87

¹¹ 沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編 第6巻 沖縄戦』（沖縄県教育委員会2017年）p. 193

¹² 前掲『知念村史』pp. 70-71

¹³ 前掲『玉城村史』p. 87

¹⁴ ただし、記録類は廃棄されたり、激しい戦火の中で焼失したりしたため、戦闘の経緯について「筆者推定」のように不確かな記述も散見される。

¹⁵ 防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』（南雲新聞社1968年）p. 530

両隊とも第62師団に配属となり、配下の部隊がそれぞれ字大里、稲嶺付近で米軍と対峙することになった。また、5月23日以来高平にあって米軍と戦火を交えていた特設第4連隊は、26日目取真、28日再び高平、30日目取真と一進一退を繰り返した後に、6月2日に撤退を命じられ、喜屋武半島へ移動した。その他には歩兵第63旅団の独立歩兵第11大隊が5月29日に大里、第13大隊が目取真、第14大隊が大城北側150高地に陣地を構えていた。翌30日、独立歩兵第11大隊は高平、第13大隊は大城でそれぞれ抗戦したが、6月2日、目取真にいた第13大隊、特設第4連隊とともに南部撤退を命じられ、移動した。一方、第14大隊だけは字大里村字大城にある150高地に陣地を構え、奮闘したが、4日10時00分頃から米軍400から500人規模の部隊の攻撃を受けている。大隊は善戦し、米軍に多大の損害を与え夕方には撃退したが、その夜旅団の命令によって目取真に後退し、5日夜米須に移動した¹⁶。知念半島の重砲兵第7連隊、船舶工兵第23連隊は、幹部の死傷が多く解隊状態を呈していたため、もはや米軍の進攻を食い止めることはできなかった。

1-3 米軍戦史

米軍の公式戦史のうち最もよく知られているものに、米国陸軍省が編んだ『沖縄 最後の戦闘』(Okinawa: The Last Battle)¹⁷がある。同書は戦後すぐの1948年(昭和23)に出され、日本では外間正四郎の邦訳により脚光を浴びることになった¹⁸。戦闘に参加した各部隊の戦史、従軍した兵士たちへの聞き取り、戦場で鹵獲した日本軍の書類や捕虜尋問調査などを用いながら、沖縄戦の様子を詳細に描いている¹⁹。後で詳しく紹介するが、米軍は「日誌」(Journal)や「電信文」(Message File)などを残していっただけではなく、各部隊に歴史家(historian)を配属し、戦闘の最中にも司令官や兵士たちへの聞き取りを行って詳細に活動を記録していった。また、邦訳が出ていないため『沖縄 最後の戦闘』ほどは知られていないものの、陸軍とともに地上戦を担った海兵隊も『沖縄 太平洋の勝利』(Okinawa: Victory in the Pacific)²⁰を刊行している。海軍と空軍(当時は陸軍航空隊)については、沖縄戦単独での刊行はないが、それぞれ『太平洋における勝利』(Victory in the Pacific)²¹、『第二次世界大戦における陸軍航空隊』(The Army Air Force in World War II)²²に沖縄戦の章がある。

しかしながら、それらさえも知念半島の戦闘については多くを語らない。1945年(昭和20)3月

¹⁶ 同上 pp. 538-563

¹⁷ Appleman, Roy E., et al., *Okinawa: The Last Battle*, Washington, D.C.: Center of Military History, 1948

¹⁸ 米国陸軍省編、外間正四郎訳『日米最後の戦闘—沖縄戦死闘の90日』(サイマル双書1968年)

¹⁹ 師団や軍団の未刊行部隊史は以下の通り。「沖縄攻略における第24軍団」(Roy E. Appleman, "The XXIV Corps in the Conquest of Okinawa, 1 April-22 June 1945," December 1945, 4 volumes)、「沖縄における第96師団(Donald Mulford and Jesse Rogers, "The 96th Division on Okinawa," no date, 4 parts)、「沖縄における第7師団の作戦」(Russell A. Gugeler, "The Operations of the 7th Infantry Division on Okinawa, 1 April to 22 June 1945," no date, 3 volumes)、「沖縄における第27師団」(Edmund G. Love, "The 27th Division on Okinawa," no date)、「沖縄における第77師団の作戦」(Paul R. Leach, "Narrative of the Operations of the 77th Division on Okinawa," no date, 2 parts)、「沖縄における第6海兵師団」(Phillips D. Carleton, "The 6th Marine Division on Okinawa," 2 volumes)、「沖縄における第1海兵師団」(James R. Stockman, "The First Marine Division on Okinawa, 1 April- 30 June 1945," Historical Division, Headquarters, U.S. Marine Corps, 1946)

²⁰ Nichols, S., Jr. and Henry I. Shaw, Jr., *Okinawa: Victory in the Pacific*, Washington, D.C.: Historical Branch, G-3 Division, Headquarters, U.S. Marine Corps, 1955. 海兵隊の第二次世界大戦の作戦全般を扱ったものに『第二次世界大戦における米国海兵隊の作戦』があり、その第5部『勝利と占領』は、本土占領及び中国北部での海兵隊活動の他、沖縄進攻作戦も扱っている。Frank, Benis M. and Henry I. Shaw, Jr., *History of U.S. Marine Corps in the World War II, Volume 5: Victory and Occupation*, Washington, D.C.: Historical Branch G-3 Division, Headquarters, U.S. Marine Corps, 1968

²¹ Morison, Samuel Eliot, *Victory in the Pacific*, Boston: Little, Brown and Company, 1975

²² 第5部には「太平洋 マッターホルンから長崎まで1944年6月～1945年8月」("The Pacific: Matterhorn to Nagasaki, June 1944 to August 1945")というタイトルで沖縄攻略作戦についての章がある。Craven, W. F. and J. L. Cate, ed., *The Army Air Force in World War II*, Chicago: The University of Chicago Press, 1953

下旬から始まった約3ヶ月にわたる米軍の沖縄攻略作戦の中で知念半島について触れられているのは、沖縄本島西海岸への上陸作戦の7日前から知念半島に対する艦砲射撃が行われたこと、読谷村渡久地海岸から上陸した際に知念半島に対して陽動作戦（おとり作戦）が展開されたこと、4月上旬には久高島への上陸が敢行されたこと、米軍の知念半島への本格的な進攻は6月1日からの3日間だったことなどである。

例外は、先に紹介した『戦史叢書』同様、大里地域の戦闘についてである。5月21日までに運玉森の攻略に成功した米軍は翌22日未明から南進を開始した。先発隊として第7歩兵師団（以下、「第7師団」）第184歩兵連隊（以下、歩兵連隊については「第184連隊」などと略記する）が任を受けた。同連隊は与那原を通過して、雨乞森を占領し、大里村役所跡後方の連丘や大里城址にかけて前線を確立した。23日の朝には与那原を通過して西進し、与那覇の小高い丘（Oak Hill）の要塞で最初の日本軍の反撃に遭った。日本軍は首里の第24師団から増援隊を派遣して24日から25日にかけて第184連隊に攻撃を行なった。また、日本軍第62師団も南下して米軍の進撃を食い止めようとしたが、たいした脅威にはならず、26日には大里城址の日本軍は掃討され、第184連隊は高平付近まで南進した。一方、西進した第32連隊は23日から26日にかけて日本軍の激しい抵抗に遭い、多くの犠牲者を出した。高平に進出した第184連隊も28日から29日にかけて日本軍の反撃を受け、足止めされた。米軍は30日から一斉攻撃を開始し、31日、南風原村喜屋武、照屋一帯の日本軍陣地の攻略に成功し、約3キロにわたる首里包圍網の確立に成功した。また、30日には米軍は知念半島に偵察隊を出したが、さしたる抵抗には会わなかったため、大規模な戦闘は行われまいだろうという見通しを立てた²³。

ただ、大里の戦闘についても描かれているのはここまでで、肝心の6月1日から3日かけて行われた知念半島への進攻作戦についての次のようなごく短い記述しかない²⁴。

第184歩兵連隊の方は、南へ、そして東へ、雨を吸いこんで、やわらかくなった知念半島の緑の連丘を、苦心しながら乗り越えていった。そこでは、たいした抵抗もなく、明らかに日本軍としては、そこら一体を防御する計画がないことを示していた。

実際には第17連隊や第32連隊も進出しているが、公式戦史では全く触れられておらず、日本軍の動きや住民のことも触れられていない。

1-4 守備軍の撤退と住民被害の関係

これまで見てきたように、知念半島における戦闘の状況は、大里村など半島の西側に位置する方がより激しかったために詳細に描かれ、東へ位置するほど戦闘が少なかったため、記述がほとんどない。この濃淡は、沖縄戦の終盤に守備軍が知念半島ではなく摩文仁のある喜屋武半島への撤退を決定したことと深い関係がある。第32軍高級参謀八原博道大佐によると、米軍が運玉森を攻略した5月19日頃、首里の首脳部ではその後の作戦方針を協議していた。その際に出たのが、「首里複郭案」「知念半島撤退案」「喜屋武半島撤退案」の3案である。そのうちの知念半島撤退案は次のような分析がなされていた²⁵。

知念半島は四周ほとんど断崖と海に囲まれて対戦車戦闘には有利である。しかし、洞窟陣地の数が少なく軍の残存兵力を收容するには不足、既集積軍需品も僅少である。

そのうえ、与那原付近が米軍の攻撃を受けて致命的破綻を生じようとしている現状におい

²³ 米国陸軍省編、外間正四郎訳『沖縄 日米最後の戦闘』（光人社1997年）pp. 410-415

²⁴ 同上 p. 454

²⁵ 前掲『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』pp. 530-532

ては、彼我の態勢上から軍主力を知念方面に撤退させることは極めて困難であり、地形、道路網の関係上も不利な状態である。

協議に参加した各兵団の参謀長や高級部員は自らの旧陣地に依ること主張し、米軍上陸前に知念半島を拠点にしていた独立混成第44旅団だけが知念半島撤退案を可とした。結局、牛島満第32軍司令官は22日夕方、喜屋武半島に撤退することを決定し、各部隊は次々に南下の準備に入っていた²⁶。こうして知念半島での決戦は回避された。このことが住民の運命を大きく左右する。

知念半島へ避難した住民の犠牲は少なく、守備軍とともに喜屋武半島に南下した住民の多くが戦闘の犠牲になった。村内戦没者の悉皆調査を行った玉城村によると、守備軍の撤退路となった現県道48号線の東側と西側では死没状況が明らかに異なっていた。西側の戦没者の多くは喜屋武半島に避難し、犠牲になっている²⁷。

以上、知念半島の戦闘がこれまでどのように描かれてきたかを見てきた。次に、米軍記録はその戦闘に関してどのような事実を提供してくれるのかを見ていきたい。

表1：第5艦隊編成表²⁸

第50機動部隊（掩護・特別部隊）
第50.8機動部隊（兵たん支援部隊）
第51機動部隊（統合遠征軍）
第51.1機動部隊（西方諸島攻撃群）
第51.2機動部隊（陽動部隊）
第52機動部隊（上陸作戦支援部隊）
第53機動部隊（北部攻撃部隊）
第54機動部隊（砲撃・掩護部隊）
第55機動部隊（南部攻撃部隊）
第56機動部隊（遠征軍）（＝第10軍）
陸軍第24軍団
第7歩兵師団
第27歩兵師団
第77歩兵師団
第81歩兵師団
第96歩兵師団
海兵第3水陸両用軍団
第1海兵師団
第2海兵師団
第6海兵師団
第57機動部隊（英国空母部隊）
第58機動部隊（高速空母部隊）

2 米軍記録とはどのようなものか

米軍は各部隊に戦闘中の作戦記録の作成と保管を義務付け、それらは一定期間を過ぎた後に米国国立公文書館に移管されているため、現在、誰でも自由に閲覧することができる。当館はそれらの記録を米国から直接または国立国会図書館（東京）などから収集している。

1945年（昭和20）の沖縄侵攻作戦は、米第5艦隊司令官のレイモンド・A・スプルーアンス提督の指揮する陸海合同機動部隊により行われた。その作戦に関する主な資料群は海軍軍令部長室「第2次世界大戦報告書」、陸軍高級副官部「第二次世界大戦作戦報告書」、海兵隊「米海兵隊地理ファイル」である。

このうち、陸軍高級副官部と海兵隊については、東京の国立国会図書館が米国国立公文書館において収集に取り組み、当館はその中から陸軍高級副官部文書2,015簿冊分、海兵隊文書462簿冊分をマイクロフィッシュで収集した。一方、海軍軍令部長室文書は国会図書館による収集対象になっていなかったため、当館は米国国立公文書館で直接収集し、現在、1,231簿冊が利用に供されている。その他、いわゆる「作戦報告書」ではないが、戦中、戦後すぐの駐留海軍の部隊運営関係の資料として海軍作戦部隊文書が669簿冊ある。

²⁶ 同上 p. 533

²⁷ 前掲『玉城村史』p. 139

²⁸ 第5艦隊の機動部隊名はすべて5の数字から始まる。

2-1 艦砲射撃及び空母艦載機による爆撃の記録

当館が所蔵する海軍軍令部長室「第2次世界大戦作戦報告書」は、米国国立公文書館が所蔵するうちのごく一部である。同資料群は、艦隊、機動部隊、空母、戦艦、巡洋艦、駆逐艦、戦車上陸用舟艇等、艦船ごとに保管されているが、当館はその中から沖縄戦に参加した艦隊、機動部隊、空母に限って収集した²⁹。ここで言う「艦隊」とは、表1にあるように、ある特定の任務を与えられた複数の「機動部隊」から成り、機動部隊は複数の艦船で構成されている。沖縄戦では途中、第5艦隊から第3艦隊への司令部替えが行われた。従って、当館には「第5艦隊 戦闘報告書」³⁰「第3艦隊作戦報告書」³¹などのように、2つの艦隊の資料がある。通常、空母の作戦報告書には艦載機による機銃掃射の詳細が記述されており、戦艦、巡洋艦、駆逐艦、戦車上陸用舟艇などの作戦報告書には艦砲射撃の記録がある。

2-2 地上戦における戦闘記録

表2：司令部の階層（知念半島の場合）

太平洋戦域
第10軍
第24軍団
第7師団
第17連隊
第1大隊
第2大隊
第3大隊
第32連隊
第1大隊
第2大隊
第3大隊
第184連隊
第1大隊
第2大隊
第3大隊

読谷村渡久地海岸から上陸した第10軍は、海兵隊第3水陸両用軍団が北進、陸軍第24軍団（以下、第24軍団）が南進した。南進した第24軍団は左翼に第7歩兵師団（以下、第7師団）、中央に第96歩兵師団（以下、第96師団）、右翼に第27歩兵師団（以下、第27師団）を据え、首里にあった日本軍司令部を目指して進撃を続けた。そのうち左翼の第7師団は東海岸に沿って進軍し、首里包圍網の東側にあたる与那原から大里にかけての日本軍守備網を突破する任務を与えられた。第7師団が南進する中、東海岸の金武湾と中城湾においても慶良間諸島と同じような艦隊の補給地及び投錨地の必要性が唱えられ、4月7日には米軍が中城湾に浮かぶ知念村の久高島に上陸している。

前章で紹介したように、日米の公式戦史における知念半島の戦闘は、1945年（昭和20）5月下旬の旧大里村の攻防については詳しく触れられているものの、第7師団が半島に本格的に進攻した6月上旬についてはどこでどのような戦闘が繰り広げられたのかがほとんど分かっていない。そこで有効なのが陸軍高級副官部「第二次世界大戦作戦報告書」である。同報告書は、表2のように、戦域（Theater）、軍（Army）、軍団（Corps）、師団（Division）、連隊（Regiment）、大隊（Battalion）、

中隊（Company）などの部隊の階層ごとにファイルされている。

さらに、各部隊の報告書は部隊司令部の4つの参謀部（General Staff）ごとにファイルされていて、その中でも地域史にとって特に有用なのが、諜報担当の参謀第2部と作戦担当の第3部の資料であ

²⁹ 米国国立公文書館での収集事業においては時間及び経費的な制約があったため、艦船に関しては空母に限定して収集を行った。その結果、艦砲射撃を担った戦艦、巡洋艦、駆逐艦などの報告書は収集対象から除かれた。

³⁰ 「第五艦隊 通し番号 0333（1945年6月21日）戦闘報告書 1945年5月27日までの琉球侵攻作戦 箱番号43」（0000111472）沖縄県公文書館所蔵

³¹ 「第三艦隊 通し番号 00228（1945年7月14日）1945年1月26日～7月1日までの第三艦隊作戦報告書 箱番号41」（0000111472）沖縄県公文書館所蔵

る³²。そのうち参謀第2部（師団まではG2、連隊以下はS2と呼ばれる）の「定期報告書」（Periodic Report）は、作戦の経緯だけではなく、殺害した敵、捕虜にした敵、地雷が埋設されていた場所、鹵獲した書類や機材及び武器、捕虜尋問調査などが含まれている。報告書の種類は司令部ごとに若干の違いはあるものの、どの部隊にも含まれるものとして「戦闘報告書」（Operation Report、Action Report）「概要」（Summary）「日誌」（Journal）がある。また、特に激しい戦闘が行われた高地や陣地に関しては手書きのスケッチや兵士らへの聞き取りを基にした詳しい戦闘の叙述（Narrative）も含まれている。

地上戦を担ったもう一つの組織である海兵隊については、「海兵隊地理ファイル」がある。同資料群には、機動部隊、第3水陸両用軍団、第1海兵師団、第2海兵師団、第6海兵師団のほか、米陸軍第10軍配下の陸軍部隊の文書も一部含まれている。具体的には「作戦計画書」「作戦指令」「戦闘報告書」「諜報報告書」「捕虜尋問書」などから成るが、戦艦や揚陸艦などの海軍の作戦報告書も一部含まれており、先に紹介した海軍軍令部長室文書を補完するものとなっている³³。本稿のテーマである知念半島の作戦については、海兵隊が関与するのは上陸時の陽動作戦だけであるが、海兵隊が担った沖縄本島中北部の戦闘や5月11日以降の首里防衛線の攻略作戦の検証には欠かせない。

2-3 グリッド・マップ（Grid Map）



図1：グリッド・マップ（大里城址周辺）

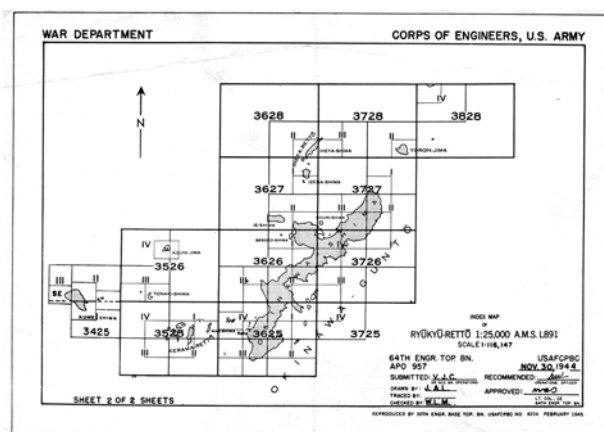


図2：グリッド・マップのインデックス

ここで、これまで紹介してきた米軍の作戦報告書を読み解く上で必要不可欠な資料に触れておきたい。それは米陸軍工兵隊が太平洋戦域で作成した各種地図（Army Map Series）のうちの一つで「L-891シリーズ」と呼ばれる2万5千分の1の戦略地図である。この地図の特徴は、等高線が引かれたカラーの地図に200ヤード（約183メートル）四方で碁盤目（Grid）の線が引かれ、その1区画ごとに8268R、8169Qのように4桁の数字にアルファベットを加えたコード番号が割り振られている点である（図1参照）³⁴。米軍は戦闘中、日本軍の重要拠点を「シュガーローフ・ヒル」（Sugar Loaf Hill）、「ハ

³² 軍から師団までは、参謀第1部（人事担当）がG1、第2部（諜報担当）がG2、第3部（作戦担当）がG3、第4部（兵站担当）がG4の略語で表される。一方、連隊以下の組織ではそれぞれS1、S2、S3、S4と表記されているが、それが幕僚部（Special Staff）の頭文字Sを表しているのか現時点では確認できていない。

³³ 資料タイトルはそれぞれ（00029-039）USS New Mexico, Action Report 21Mar-28May45 - Okinawa [001/003]、（00029-032）USS LST 617, Action Report 19Mar-23Jun45 - Okinawa となる。

³⁴ アイスバーグ作戦（沖縄戦）戦術用地図2万5千分の1 YONABARU SW 与那原 南西 再版（000059013）沖縄県公文書館所蔵。目標地域コードの一部には8268R5のように、4桁の数字+アルファベットの後にさらに1から5までの数字が付いている場合もあり、これは目標地域をさらに細かく限定するためのものと思われるが、現時点ではそれが何を指しているのか不明である。

クソー・リッジ」(Hacksaw Ridge)などのコード・ネームで呼んでいたが、作戦報告書では、それらの拠点をすべてグリッド・マップのコード番号で示している。次章で詳しく見ていくように、この番号が分からないと、それらがどの地点に言及しているのかが全く分からない。

本稿のテーマである、米軍記録を地域史に生かすためにはこのマップの収集が欠かせない。筆者が入手した地図のインデックス(図2)によると、沖縄全体で51枚のグリッド・マップが存在することが分かるが、知念半島区域については、そのうち「与那原・南東」(3625 I SE)「与那原・南西」(3625 I SW)「玉城・北東」(3625 II NE)「玉城・北西」(3625 II NW)「糸満・北東」(3625 III NE)「那覇・南東」(3625 IV SE)の6枚が必要である。グリッド・マップの原本は米国国立公文書館が所蔵しているが、当館にはその一部しかないため、その収集が大きな課題である。

以上、ファイリングを中心に米軍記録の概要を見てきた。次章では、これらの記録が地域の沖縄戦を理解する上でどのような視座を提供してくれるのかを具体的に見ていく。

3 米軍記録から明らかになること

第1章で紹介したように、これまでの公式戦史や自治体史などで知念半島の戦闘について触れられているのは、沖縄本島西海岸への上陸作戦の7日前から久高島に対する艦砲射撃が行われたこと、同上陸作戦の際には知念半島に対して陽動作戦(おとり作戦)が展開されたこと、1945年(昭和20)4月上旬には久高島への上陸が敢行されたこと、米軍の知念半島への本格的な進攻は6月1日からの3日間だったこと、沖縄戦の終盤に沖縄本島南部における民間人の収容地区に指定されたことなどであるが、その詳細は明らかになっていない。その中から本章では、知念半島に対して行われた上陸陽動作戦がもたらした被害、6月1日からの半島進攻作戦の内容、収容所の開設日など、これまで不明だった点に絞って見ていくことにする。

3-1 知念半島への陽動作戦と艦砲射撃による被害

沖縄戦では上陸開始8日後に控えた1945年(昭和20)3月24日に上陸支援のための艦砲射撃が開始され、3月26日から4月1日までの間に、5つの機動部隊が読谷・嘉手納の上陸地点、慶良間、那覇、知念半島、喜屋武岬に向け5,160トンもの砲弾を撃ち込んだ³⁵。米軍が上陸した本島西海岸だけではなく、東海岸にも砲撃したのは、上陸すると見せかけた陽動作戦が行われたからであった。西海岸への上陸作戦が万一成功しなかった場合は、米軍は第2案として中城湾及び知念半島への上陸を計画していた(図3)³⁶。上陸前艦砲射撃の内訳は、直径5から16インチ砲弾が約2万7千発、5インチ対空砲が約4千発、そして5インチ以下については集計することが不可能なほどであった³⁷。この攻撃によって住民の間に甚大な被害が出た。その激しさは、戦争を生き延びた人々をして自ら「カン

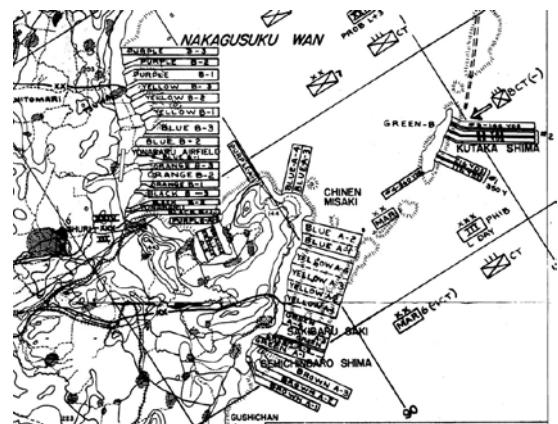


図3: 上陸代替案(中城湾及び知念半島)

³⁵ 前掲『沖縄 日米最後の戦闘』pp. 75-76

³⁶ 同上 p. 44-45. 「(00397-004) Second Marine Division, Serial 000135L (27 Feb 1945), Operation Plan No. 12-45: Alternate Plan」(0000092732) 沖縄県公文書館所蔵

³⁷ 航空機からの爆弾投下や地上での砲撃なども含めると、沖縄戦全体では20万トンの爆弾が撃ち込まれ、県内には今なお2千トンにおよぶ不発弾が埋もれているとされる。前掲『沖縄県史 各論編 第6巻 沖縄戦』pp. 647, 652

ポーヌ、クウェーヌクサー」(「艦砲の喰い残し」の意)と呼ばしめたことから想像できる。それにより多くの日本軍施設や陣地が破壊され、多くの犠牲者が出た。しかし、久高島を含めたこれら作戦の詳細は分かっていない。唯一の記述は、先に紹介した『知念村史』で、3月24日の艦砲射撃で知念岬の斎場御嶽周辺に直径約25メートルのクレーターが数十ヵ所にできるなど甚大な被害を受けたとある。今回、その作戦報告書が残っていることが分かった。

それによると、知念半島と久高島の海岸防衛施設の破壊や第52.3機動部隊による掃海作業を援護するための臨時の任務部隊として、3月24日、第59.7機動部隊が結成された。同機動部隊は複数のサブ機動部隊から成っていたが、当館にはその一つである第59.7.1機動部隊(第7戦艦梯隊)の報告書がある³⁸。それによると、3月24日8時50分から14時30分までの間、知念半島と久高島に艦砲射撃が行われ、510発もの砲弾が撃ち込まれた。



図4：知念岬周辺

9065E地点(知念岬*)にあった8つの防御施設のうち5つは完全に破壊され、残りも損傷を受けた。同地域の管制塔と弾薬庫は爆破された。8966地点(字久手堅*)にある兵舎、学校、その他の大きな施設も破壊されるか、ひどい損害を受けた。9065E地点(知念岬*)の弾薬庫または化学薬品庫が爆破された際、黄みがかった茶色の炎が約300メートルの高さまで上がるのが観察された。9066U地点(字久手堅*)のトラック駐車場とそれを取り巻く建物は破壊されるかひどい損傷を受け、爆撃部隊が任務を終了するまで燃え続けていた。8965T地点(知念村字知念)にある大きなコンクリートの倉庫とそれを取り巻く建物は破壊されるかひどい損傷を受けた。複数場所で火災が発生し、他の目標区域でも大きな損害を与えたが、軍事施設名は不明である。(以上、筆者訳。*印は筆者注)

『沖縄県史』では、3月24日、本島には約700発の艦砲射撃が加えられたとなっているが、一機動部隊だけでも510発が発射されていることから、本島全域での実数はさらに多かったと思われる³⁹。

その後、4月1日に沖縄本島西海岸から〈無血上陸〉した米軍は、島を分断した後に、第3水陸両用軍団が北へ、第24軍団が南へ進軍した。中南部で待ち受けていたのは首里に司令部を置く、約6万5千から7万人規模の日本軍の守備隊であった。米軍は、宜野湾村から中城村にかけての敷かれていた強固な首里防衛ラインを突破すべく、4月19日に総攻撃を実施した。その際、航空機や艦船からの後方陣地及び司令部への攻撃に加えて、守備隊を攪乱すべく再び知念半島への上陸陽動作戦を実施している⁴⁰。

これまでこの2度目の陽動作戦の詳細も明らかになっていなかったが、今回、作戦報告書が残っていることが判明した。それによると、同作戦でも再び臨時の任務部隊が結成されることとなり、4月18日、第58.3機動部隊に所属していた戦艦3隻と駆逐艦3隻が抽出され、第58.7機動部隊が結成さ

³⁸ 「第59.7.1機動部隊 通し番号027(1945年4月2日) 指定目標爆撃報告書 沖縄島南東海岸・久高島1945年3月24日」(0000111473) 沖縄県公文書館所蔵。同報告書によると、同日の津堅島への砲撃は急きょ中止された。その理由としては作戦の時間が短縮されたこと、久高島砲撃の際に採取された着弾音の分析から550等深線(約1,000m)域外からの減装弾による砲撃は効果がないことが判明したからであった。その結果、津堅島へは空母艦載機による爆撃に変更された。現在のところ、その作戦に参加した空母やそれに付随する作戦報告書が特定できていないため、作戦の詳細は不明である。

³⁹ 前掲『沖縄県史 各論編 第6巻 沖縄戦』p.197

⁴⁰ 前掲『沖縄 日米最後の戦闘』pp.180-182

れた。戦艦群は第 58.7.1 機動部隊として、また、駆逐艦群は第 58.7.2 機動部隊として、翌 19 日、第 51.23 機動部隊を中心とした陽動作戦に参加している。

そのうち、戦艦群の第 58.7.1 機動部隊の報告書によると、同日 6 時 47 分から 11 時 52 分までの間に 608 発の 16 インチ砲、116 発の 5 インチ対空砲が火を噴いた。報告書には次のような着弾地点が列挙されている。これを見ると、米軍は闇雲に艦砲射撃を行っていたのではなく、偵察情報を基にピンポイントで攻撃目標を設定していたことが分かる。

8362A 地点（玉城字當山*）のガン入り口破壊、8262K 地点（具志頭字新城*）の遮蔽されたレンガ小屋、8363K 地点（玉城字前川*）、8663X、Y 地点（玉城字百名*）の砲座、8662Y 地点（玉城字志堅原*）の地下壕入り口 2 ヶ所、8261D、J 地点（具志頭字長毛*）の遮蔽されていた擁壁 8 ヶ所、8162L、N 地点（具志頭字新城*）では火災が発生、8162M、N、P、Q 地点（具志頭字新城*）及び 8161A、B、G、H 地点（具志頭字具志頭*）のガンや地下壕入口、8665W 地点（佐敷字つきしろ*）の 6 インチ砲 [未確認]、8664N 地点（玉城字垣花*）の遮蔽されていた大砲、8262J 地点（玉城字堀川*）の無人の塹壕及びコンクリートの砲座などである⁴¹。（*地名はすべてグリッド・マップとの照合による筆者特定）

もう一方の駆逐艦群の第 58.7.2 機動部隊による艦砲射撃は 6 時 35 分に開始され、657 発の対空通常弾と 4 発の白リン弾砲弾を撃ち込んだ⁴²。

これらのことから、この日、知念半島には 2 つの機動部隊が約 5 時間にわたって 1,400 発近い砲弾を撃ち込んだことになる。その 4 割にあたる約 600 発は 16 インチ砲であった。16 インチ砲の砲弾は、直径 40 cm、長さ 162 cm、重量 1 トンで、それが爆発した場合、破片は半径 300 ～ 500m ほど飛び散り、150 メートル範囲は即死すると言われている⁴³。また、4 発の白リン弾も使用されているが、白リン弾は発煙弾としてだけではなく、焼夷弾としての機能もあるため、被弾地域が火の海となったであろうことは想像に難くない。

また、日本陸軍の公式戦史である『沖縄方面陸軍作戦』によると、次のように 5 月 20 日にも知念半島に対する陽動作戦が行われたようであるが、作戦報告書が特定できないために詳細は不明である⁴⁴。

5 月 20 日早朝、米艦船は久高島を砲撃し、6 時 30 分頃、奥武島の一部に米軍が上陸して 10 時頃に撤退した。軍司令部は、知念半島における米軍の行動及び新船団の到着状況などから知念半島方面への米軍の新上陸の算大なりと判断し、この方面の艦船に対する航空攻撃を要請した。

このように、中城湾を望む知念半島は、上陸地点としても適していたことから、数回にわたり大規模な陽動作戦が実施された。陽動作戦には艦砲射撃が伴うものであることから、知念半島にはその度に大量の砲弾が撃ち込まれたのである。

3-2 地上部隊による知念半島攻略作戦

5 月末に南風原村喜屋武、照屋一帯の日本軍陣地の攻略に成功し、約 3 キロにわたる首里包囲網の

⁴¹ 「第 58.7.1 機動部隊 通し番号 049 (1945 年 4 月 21 日) 第 58.7.1 機動部隊 沖縄島爆撃報告書 1945 年 4 月 19 日」(0000111473) 沖縄県公文書館所蔵

⁴² 「第 58.7.2 機動部隊 通し番号 019 (1945 年 4 月 20 日) 戦闘報告書」(0000111473) 沖縄県公文書館所蔵

⁴³ 現在でも沖縄各地で行われている不発弾処理の際、住民は周囲約 1 キロにわたって避難する。『沖縄タイムス』(2014 年 1 月 27 日)「1 トン不発弾、現地処理 住民避難『戦争思い出す』」

⁴⁴ 前掲『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』p. 527

確立に成功した第96師団及び第7師団は、6月1日から知念半島への進攻を開始する。しかし、作戦の詳しい内容は分かっていない。ここで、各部隊の作戦報告書から何が分かるのかを見ていくことにする。

表3: 知念半島の主な拠点高地リスト

高地	TAコード ¹⁾	地域(筆者特定)
Bamboo Hill	8268R	大里字古堅
Canary Hill	8170R	南風原字与那覇(与那覇グスク)
Duck Hill	8068S	南風原字宮平/大里字古堅
Ella Hill	8069E	南風原字与那覇(エネス与那覇店)
Helen Hill	8166X	大里字仲間(大里南小裏)
Mable Hill	8068G	南風原字喜屋武(旧陸軍病院壕)
Oak Hill	8169Q	大里字古堅
Spruce Hill	8269C	与那原字与那原(クララ幼稚園)
Squirrel Hill	8465X	玉城字親慶原(下親慶原)
Walnut Hill	8565L	佐敷字つきしろ
Yellowtail Hill	8268B	大里字古堅
Hill 117	8265B	大里字大城(大成電機の裏付近)
Hill 125A	8365C	大里字大城(大城城跡東方の丘)
Hill 132	8263I	玉城字前川
Hill 138	8363K	玉城字前川
Hill 142B	8465H	佐敷字新里(ユインチホテル付近)
Hill 145	8365A	大里字大城(大城城跡)
Hill 147	8764J	知念字山里
Hill 152	8464B	玉城字糸数(ダム付近)
Hill 165	8665R	佐敷字つきしろ
Hill 173	8464Y	玉城字喜良原(喜良原体育館裏手)
Hill 175	8364C	玉城字糸数(保安通信所裏手)
Hill 181	8366H	大里字大城(稲福無線中継所付近)
Hill 187	8364W	玉城字糸数(糸数城跡付近)
Hill 197	8364S	玉城字糸数(アブチラガマ付近)

175高地(筆者注・現保安通信所の裏手付近)、197高地(筆者注・アブチラガマ付近)まで進出し、作戦を展開している⁴⁹⁾。一方、第184連隊も激しい戦闘の末に181高地(筆者注・稲福無線中継所付近)を確保したが、その後も日本軍の散発的な機関銃や狙撃兵の発砲に悩まされた。連隊の一部は大里村

第7師団は第17連隊、第32連隊、第184連隊の3つ連隊から構成され、右翼に第17連隊、中央に第184連隊、左翼に第32連隊を配置して進軍していった⁴⁵⁾。第17連隊と第184連隊は大里から玉城、第32連隊は佐敷から知念地区を担当した。一方、第96師団は第7師団の右側に位置して、第381連隊が大里村の高平、稲福を通過して南下した。『戦史叢書』によると高平、稲福でその第96師団を迎え撃つたのは、特設第4連隊及び独立歩兵第11大隊であった⁴⁶⁾。本稿では知念半島進攻作戦の中心を担った第7師団の作戦に絞って、見ていくことにする。

6月1日に進攻を開始した第7師団は第17連隊と第184連隊が大里に陣地を構える日本軍守備隊と対峙した。第17連隊は、大里村字大城にある117高地(筆者注・現大成電機の裏手)で日本軍から激しい抵抗を受けている⁴⁷⁾。『戦史叢書』によると、その時大城で陣地を構えていたのは、独立歩兵第14大隊であった⁴⁸⁾。また、第17連隊の一部は玉城村糸数の152高地(筆者注・現糸数ダム付近)、

⁴⁵⁾ 兵力は、「第184連隊5月31日付け部隊日誌」では総員2,454人となっており、師団全体としては約7,000人規模であったと推察できる。「(07157-001) 307-INF (184) -0.7: 7th Infantry Division - Regimental Journal (Section II) - 184th Infantry Regiment - Okinawa Shima (15 May - Jun 1945) [001/003]」(0000133213) 沖縄県公文書館所蔵

⁴⁶⁾ 前掲『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』p. 555-556

⁴⁷⁾ 「(07143-003) 307-INF (32) -3.1: 7th Infantry Division - S-3 Periodic Reports - 32nd Infantry Regiment - Ryukyus Campaign (Apr - Jun 1945) [001/006]」(0000133180) 沖縄県公文書館所蔵

⁴⁸⁾ 前掲『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』p. 556

⁴⁹⁾ 「(07115-002) 307-INF (17) -0.3: 7th Infantry Division - Operations Report - 17th Infantry Regiment - Ryukyus Campaign (1 Apr - 30 Jun 1945) [004/007]」(0000133108) 沖縄県公文書館所蔵

大城の 125 高地（筆者注・大城城址東方の丘）、佐敷村字新里の 142 高地（筆者注・現ユインチホテル付近）へ進出、激しい抵抗を受けた⁵⁰。このことから、第 17 連隊及び第 184 連隊ともに大城の日本軍陣地攻略に兵力を割きながらも、玉城村字糸数や佐敷村字新里まで部隊を展開していたことが分かる。1 つの連隊の規模は 2,000 人前後であるから、2 つの連隊では約 4,000 人が大城、糸数、新里付近に展開していたことになる⁵¹。また、この日は海軍による艦砲射撃の援護があり、8268 A 地点（筆者注・大里村字古堅）及び 8163 Y 地点（筆者注・玉城村字前川）で、約 35 名の敵を粉砕したとある。8163 R S T 地点（筆者注・玉城村字前川）にも攪乱射撃（harassing fire）が行われた⁵²。

翌 6 月 2 日も前日同様、第 17 連隊及び第 184 連隊ともに大城、糸数、新里付近で作戦を展開している。第 17 連隊第 2 大隊は大里村大城の 117 高地において組織化された激しい抵抗に遭い、夜になってようやく陣地の攻略に成功した⁵³。また、同第 3 大隊も前日同様、玉城村字糸数の 175 高地で作戦を展開した⁵⁴。一方、第 184 連隊は、大里村字大城の 181 高地の北東傾斜面は占拠したものの、尾根線の占拠には失敗している。同日の作戦について、同連隊の各大隊の報告書にはさらに次のような比較的細かい状況まで記されている。第 1 大隊は 181 高地付近で 152 人の敵を発見⁵⁵。また、10 時 52 分、181 高地付近のガマで食糧、弾薬を発見。12 時 50 分には新里地区に 150 mm 砲 5 発が着弾している。また、16 時 00 分には新里でよくカモフラージュされた 6 基の地雷を発見。新里には 5 つのロード・ブロックがあったが、ブービー・トラップは発見されず、ブルドーザーは通行できる状態であった。17 時 10 分、お昼過ぎの新里への砲撃は 1 km 先からも聞こえたという報告が入っている⁵⁶。また、第 2 大隊は新里、佐敷方面に進出、16 時 00 分、集落は完全に無人となっていると報告⁵⁷。一方、第 3 大隊は、前進して 8365B 地点の 145 高地（筆者注・大城城跡）の北西部は占拠したものの、頂上を攻略することはできなかった⁵⁸。

6 月 1 日から 2 日間にわたって大城、糸数、新里付近の日本軍の抵抗に悩まされた第 7 師団は、6 月 3 日、一気に知念半島全域に進軍していく。第 17 連隊は前日に苦戦を強いられた 181 高地や 145 高地の攻略に成功し、第 184 連隊と協力しながら進軍を続け、8364S 地点の 197 高地（筆者注・玉城村糸数のアブチラガマ付近）の南東に到達した⁵⁹。また、玉城村の字糸数、富里、當山、志堅原へ偵察隊を出し、15 人の敵を殺害、500 人もの民間人を収容している⁶⁰。一方で、佐敷村字新里から佐佐敷、手登根を見渡す尾根線に沿って進軍していた第 32 連隊第 1 大隊は、多数の洞窟（ガマ）を発見し、14 人の日本人兵を殺害した。また、同第 3 大隊も 8665 R 地点の 165 高地（筆者注・佐敷村つきしろ）及び 8764 J 地点の 147 高地（筆者注・知念村字山里）で約 100 人の住民を収容している⁶¹。

⁵⁰ 「(07166-002) 307-INF (184) 7-0.2: 7th Infantry Division - Historical Record - 1st Battalion - 184th Infantry Regiment - Okinawa Shima (Apr - Jun 1945)」(0000133253) 沖縄県公文書館所蔵

⁵¹ 前掲「Regimental Journal (Section II) - 184th Infantry Regiment [001/003]」(0000133213) 沖縄県公文書館所蔵

⁵² 前掲「S-3 Periodic Reports - 32nd Infantry Regiment [001/006]」(0000133180) 沖縄県公文書館所蔵

⁵³ 同上

⁵⁴ 前掲「Operations Report - 17th Infantry Regiment [004/007]」(0000133108) 沖縄県公文書館所蔵

⁵⁵ 「(07167-001) 307-INF (184) 7-0.7: 7th Infantry Division - Journal - Company D - 1st Battalion - 184th Infantry Regiment - Okinawa Shima (Apr - 21 Jun 1945) [002/003]」(0000133257) 沖縄県公文書館所蔵

⁵⁶ 同上

⁵⁷ 「(07169-001) 307-INF (184) 7-0.7: 7th Infantry Division - Journal - 2nd Battalion - 184th Infantry Regiment - Okinawa Shima (13 Mar - Jun 1945) [002/002]」(0000133264) 沖縄県公文書館所蔵

⁵⁸ 前掲「S-3 Periodic Reports - 32nd Infantry Regiment [001/006]」(0000133180) 沖縄県公文書館所蔵

⁵⁹ 同上

⁶⁰ 前掲「Operations Report - 17th Infantry Regiment [004/007]」(0000133108) 沖縄県公文書館所蔵

⁶¹ 同上。「(07135-009) 307-INF (32) -0.3: 7th Infantry Division - Operations Report - 32nd Infantry Regiment - Ryukyus Campaign (1 Apr - 30 Jun 1945) [001/002]」(0000133145) 沖縄県公文書館所蔵

第184連隊第1大隊は進軍を続け、玉城村垣花の海岸にまで到達している⁶²。また、同大隊の報告書は次のような細かい状況を記録している。

16時05分、24軍団による10万人目の敵を殺害。20時25分、奥武島にかかる500フィート橋を破壊。絶対に必要な場合を除いて集落を破壊しないよう指示あり⁶³。

また、第2大隊の報告書は次のようになっている。

6月3日09時25分、新里の南西に30発の砲弾が着弾。12時45分、兵士も含む多くの住民がガマに居るが、呼び掛けても出てこないため火炎放射器を要請。通訳を手配する。14時45分、通訳の手配完了。21時05分、師団本部から可能なら集落をそのまま残したい旨連絡あり。明日は奥武島のパトロール予定⁶⁴。

6月4日には第7師団の一部は知念半島を通過して、喜屋武半島へと進出した。第17連隊は、8163 M 地点（筆者注・玉城村字前川）から8162 N 地点（筆者注・具志頭村字新城）まで進軍⁶⁵。第3大隊I中隊は玉城村字前川で民間人600人を発見し、大城の仮設キャンプへ収容した⁶⁶。先に紹介した、旧玉城村による戦没者の悉皆調査で、現県道48号線沿いの前川区の犠牲者の多くが村外で亡くなったことが分かっているが、守備軍とともに喜屋武半島に避難さえしていなければ、その時、第17連隊により保護されていた可能性もある。

第184連隊も、第17連隊と協力しながら8162 S 地点（筆者注・具志頭村字新城）、8261 O 地点（筆者注・具志頭村字港川）まで進軍した。多少細かくなるが、同第1大隊の報告書によると、07時50分、3人の民間人を殺害。また一人の日本兵が民家に入り、民間人の服に着替えるのを目撃。14時50分、艦砲射撃があり、大きな被害を与えた。16時30分、ブルドーザーが地雷を踏み、3人死亡、3人負傷⁶⁷。また、第3大隊の報告書によると、6月4日10時00分、富里のガマでも多くの住民を発見とある⁶⁸。一方、第32連隊は、知念村字安座間の海岸道に沿って、道路を塞ぐ障害物を取り除きながら進軍した。そのうち第3大隊L中隊は、8966 NS 地点（筆者注・佐敷村字手登根から知念村知念に抜ける道）を経由して移動し、軽度の抵抗にあっただけで、8965 P 地点の48高地（筆者注・知念村字知念）に到達した。K中隊は高原を横切って移動し、多数の民間人に遭遇しながら、久手堅の町に入っていった。

以上、6月1日から4日までの第7師団の動きを各連隊及び大隊の作戦報告書から見ていった。それによると、知念半島で特に戦闘が激しかったのは大里村字大城付近で、攻略に2日かかっている。その後、玉城村糸数や佐敷村新里辺りで残存部隊の抵抗を受けるものの、日本軍の抵抗線は完全に崩壊し、3日には一気に海岸線まで進軍している。その間、数百人規模で民間人を発見し、仮設キャンプに収容していった。例外的な事件を除いて、米軍はむやみに住民を殺害したりはしなかった。また、作戦上必要な場合を除いて、集落を破壊するようなこともしなかった。それは知念半島を民間人収容所に指定したからである。次節ではその民間人収容所について見ていく。

⁶² 前掲「Historical Record - 1st Battalion - 184th Infantry Regiment」（0000133253）沖縄県公文書館所蔵

⁶³ 前掲「Journal - Company D - 1st Battalion - 184th Infantry Regiment」（0000133257）沖縄県公文書館所蔵

⁶⁴ 「(07169-001) 307-INF (184) 7-0.7: 7th Infantry Division - Journal - 2nd Battalion - 184th Infantry Regiment - Okinawa Shima (13 Mar - Jun 1945) [002/002]」（0000133264）沖縄県公文書館所蔵

⁶⁵ 前掲「S-3 Periodic Reports - 32nd Infantry Regiment [001/006]」（0000133180）沖縄県公文書館所蔵

⁶⁶ 前掲「Operations Report - 17th Infantry Regiment [004/007]」（0000133108）沖縄県公文書館所蔵

⁶⁷ 前掲「Journal - Company D - 1st Battalion - 184th Infantry Regiment」（0000133257）沖縄県公文書館所蔵

⁶⁸ 「(07170-010) 307-INF (184) 7-0.7: 7th Infantry Division - Journal & File - 3rd Battalion - 184th Infantry Regiment - Ryukyus Campaign (Apr - Jun 1945) [002/009]」（0000133269）沖縄県公文書館所蔵

3-3 収容所となった知念半島

沖縄戦における知念半島の役割について特筆すべきは、終盤、半島全体が民間人収容所（以下、「収容所」としての役割を担ったことである。収容所における体験については多くの住民証言があるが、米軍による収容所の設立過程についてはこれまで設立日も含めて不明な点が多かった。

第24軍団の作戦報告書によると、次のように5月中旬にはすでに知念半島を民間人収容所にする決定がなされたようだ⁶⁹。

5月19日までに首里・与那原ラインの崩壊は明らかで、その結果大量の民間人が投降してくることも明らかだった。第24軍団は状況に対応するためにすぐに計画を立てた。分遣隊A-4は与那原に民間人集積所を設置し6月4日までには移動するという命令にすぐ対応できるようにスタンバイしていた。想定される数やひどい道路の状況のために、即座に北へ避難させることは合理的ではなく、知念半島が制圧され次第すべての民間人をそこに移動させることが決定された。

佐敷から知念の丘陵地を通して知念半島の深く進軍した第32連隊の報告書によると、陸軍軍政府が佐敷村字屋比久において知念半島の北東地域で収容された民間人のため、6月4日に収容所を設立したとある。また、同日の第24軍団の報告書では「知念半島は第24軍団によって利用できるようになり、民間人収容所が稲嶺、屋比久、当山、百名に設置された。」となっている⁷⁰。民間人の一時的な集積所は数か所に設置されたようだが、比較的規模の大きなものを屋比久に、そして百名には「タウン」規模の収容所を設置し、最終的には知念半島東海岸の民間人はすべてそこへ収容することになったとある⁷¹。



図5：収容所の民間人

それを裏付けるものとして、第7歩兵師団の1945年（昭和20）6月4日付G2定期報告には6月5日散布予定の宣伝ビラの英訳が添付されている⁷²。

沖縄の住民の皆さんへ

この戦のために島尻地域に避難し、不快な状況に置かれている皆さんに対してアメリカ軍から以下のようなお願いがあります。

皆さんがこのまま戦闘地域に居続けると、生命の危険にさらされ続けます。米国政府は、佐敷村屋比久及び玉城村百名に民間人収容所を設立しました。戦闘部隊に属していない皆さんがちゃんと保護されるように、これらのルールに従ってください。

1. 直ちに屋比久または百名のどちらか近い方に向かってください。
2. 毛布と調理器具を持参してください。我が軍は、自由に使える十分な食料、水及び医療用品を持っています。

3. 夜間の移動は危険なので、昼間の時間帯にだけ移動してください。（後略）

また、収容所設置に関する記述内容から、資料の背景に関する新たな事実も判明した。図5の写真について陸軍通信隊が付けたオリジナル・キャプションはYikabu（下線筆者、以下同じ）となって

⁶⁹ 「Okinawa Campaign XXIV Corps Action Report, April 1, 1945 – June 30, 1945」(0000111468) 沖縄県公文書館所蔵

⁷⁰ 同上

⁷¹ 前掲「Operations Report - 32nd Infantry Regiment [001/002]」(0000133145) 沖縄県公文書館所蔵

⁷² 「(07039-003) 307-2.1: 7th Infantry Division - G-2 Periodic Reports (Nos. 62 - 92) - Ryukyus (Jun - 1 Jul 1945) [001/005]」(0000132632) 沖縄県公文書館所蔵。ここではその和訳を紹介するが、英文からの訳であるため、実際のビラの日本語とは異なる可能性がある点に留意いただきたい。

いるが、「イカブ」という地名は存在しないことから、当館の「写真が語る沖縄」のデータベースでは6枚の写真に Yakabu と修正を施してある。それを基にこれまで多くの刊行物で玉城村字屋嘉部の写真として紹介されている⁷³。しかし、今回見ていった米軍の作戦報告書のどこにも屋嘉部に収容所を設置したという記録はないことから、Yikabu は Yabiku のタイピング・ミスで、佐敷村字屋比久の写真ではなかろうか。

民間人の収容者数はその後次第に膨れ上がり、百名収容所の人口は、島司令部 (Island Command) が作戦指揮権を引き取った6月10日に8,061人、さらに、6月5日から10日にかけては13,285人の民間人が知念半島に避難させられてきた。第24軍団の報告書によると、本島南端にいた民間人はそれまでに収容された他の地域の民間人よりもはるかに身体の状態が悪かった。少なくとも30%が医療処置を必要とし、松葉杖が必要なケースが何百もあり、救急処置を必要とするケースは百名の病院に送られた。6月10日から30日の間に第24軍団は計28,194人の民間人を収容し、そのほとんどは知念半島に移動させている。本島南端で3つの民間人地区を設けるという当初の計画は早期に放棄され、すべての軍政チームは民間人を後方か知念半島の島司令部収容所に移送することになった⁷⁴。

おわりに

筆者はアーキビストとしての本務の傍ら、2011年度(平成23)から南城市史、2015年度(平成27)からは八重瀬町史の戦争編専門委員として主に米軍記録の収録作業に携わってきた。そこで分かったことは、これまで編まれてきた自治体史において米軍記録は体系的に活用されてこなかったという事実である。沖縄戦研究の第一人者で、両専門委員会の委員長も務める吉浜忍沖縄国際大学教授によると、市町村史の戦争編はこれまで日米公式戦史、住民の証言録、旧日本軍記録などを活用して編纂が行われ、米軍記録はほとんど使われてこなかった。今後、それらの記録を活用することにより、沖縄戦の歴史を書き直せる可能性があると言う⁷⁵。戦後73年が過ぎ、当時の状況を詳しく知る世代の多くが他界または80代後半になった今、戦争体験を記録に残す最後のチャンスだと言われている。今後、戦争体験者がすべてこの世を去った時、沖縄戦の歴史を後世に伝えていけるのは記録や遺跡といった有形のものだけとなる。そのような中、当館は、2017年(平成29)3月、東京の国立国会図書館から第二次世界大戦作戦報告書約51万頁、米海兵隊地理ファイル約7万頁をマイクロフィッシュで収集した。しかしながら、これらの記録は、すべてが英文であること、米軍の分類が独特であることなどから、その活用は一筋縄ではいかない。それが本稿に取り組むことになったきっかけであるが、今回は限られた紙幅の中で知念半島の作戦の全てを網羅することはできなかった。例えば、本稿で取り上げた艦砲射撃だけではなく、空母艦載機や陸軍航空隊による機銃掃射、摩文仁の守備軍が崩壊した後の知念半島の掃討作戦なども報告書を丹念に紐解きながら、住民にどのような被害をもたらしたかの検証が必要である。戦中・戦後を通して米軍とかかわりの深い沖縄という地に生を受けたアーキビストとして、このような歴史の再検証作業に微力なりにも貢献できればと思う。まだ不十分ではあるが、本稿をその第一歩にしたい。

⁷³ 前掲『玉城村史』口絵

⁷⁴ 前掲「Okinawa Campaign XXIV Corps Action Report」

⁷⁵ (公財)沖縄県文化振興会「平成29年度公文書活用講座 米軍作成の沖縄戦関係資料」(沖縄県公文書館2017年9月9日)における提言。吉浜氏は、昨春四十数年ぶりに発刊された沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史各論編6 沖縄戦』(沖縄県教育委員会2017年)でさえも数十年後にはさらなる研究成果により書き直す必要性に言及している。